

---

# 『レ』はツンデレの『レ』

高浜ゆりえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『レ』はツンデレの『レ』

### 【Nコード】

N9927A

### 【作者名】

高浜ゆりえ

### 【あらすじ】

ツンデレ短編小説です。ツンデレってなに？という問いに対する、一つの解答としての作品です。ツンの道を行き、デレを司る少女のお話。

僕の後輩（ ）は、何かにつけて僕につっかってくる。

ツリ目でショートヘア、僕の前だといつもへの字口。

廊下とかですれ違っても。

「先輩、ちょっと邪魔です」

いつもこんな調子だ。

だから僕も。

「あゝはいはい、どきますよ」

こんな調子だ。

しかし、流石にこの前はキレたよ。

放課後の校庭で足掛けされたから。

「って……てえなオイ！」

コケて立ち上がった僕は思わず叫びましたよ。

「なんなんだよ！なんか俺に言いたいことがあるなら言えばいいだろ！」

叫び終わったら、後輩は俯いて泣いていた。

「…それが…」

後輩は僕の視線を感じるとすぐに背を向けたから、それ以降はどんな顔をしていたかわからないけど。

「…それが言えたら…こんなことしませんよ！」

後輩の涙は、僕の脳裏に焼き付いて。

なんだか悲しい気持ちになった。

「…とっ…とりあえず、使えよ」

後輩の気持ちがよくわからなかったから、とりあえず後輩の正面に回ってハンカチを渡したら。

「……………とうございます…」

最初はよく聞き取れなかったけど、お礼の言葉だったみたいだ。

「…先輩……………」

後輩は涙を拭いて、濡れたハンカチを見つめた。

「先輩はどうして こんなに絡んでくるっざい後輩に…そんなことをしてくれるんですか？」

私は少し考えこんで、後輩に背を向けた。

正面向いて言うには、少し恥ずかしかった。

「お前さ…俺に絡んでくること以外は、普通に 真面目でいい奴だろ？」

背後の後輩は、驚いているみたいだった。

「…そんな…」

僕は、構わず続けた。

「文化祭とか、学級委員とか……正直、俺なんかよりよっぽど色々なことをこなしてるだろ？」

振り返って、驚いて瞳を見開いている後輩を見つめた。  
僕は、苦笑いをしてみた。

「だからさ…ストレスがたまって 俺にやっちゃまってんのかなって  
思うと… 仕方ないなって 気がすんだよ」

僕はそう考えていた、だから嘘じゃない。

後輩は確かに僕より仕事をしてるから仕方ないと思っていた…

「…違う…！」

後輩はそれを聞くと、更に驚いて…戸惑っているみたいだった。

「……違います！」

後輩は、ハンカチを両手で抱えて赤面した。  
そして、意を決したかのように言っ たんだ。

「私が先輩に……絡むのは……気になるからです」

へ？ と口を開けてしまった。

「先輩が……気になるからですよ！」

気になる……という言葉の意味は、僕でも分かっているが。

「……え……？」

一応、念押しをしてみた。



「…それって…」

後輩は赤面しながら私に迫った。  
その間60cmくらい、多分。

「先輩が気になるから……先輩が他の子と楽しそうに喋っていたから…嫌だった！」

後輩は、意を決したかのようにハンカチを僕に差し出した。

「……………」

ハンカチを渡す後輩の手を、僕は握った。

「?!…先輩っ?」

僕にとっては初めてだ、フォークダンス以外で女の子を握るのは。

「…なっ…なんでっ!?!」

後輩はツリ目気味の瞳を大きく見開いて驚いていた。

僕も大胆な自分に驚いていた。

「俺 そんな風に女の子から好かれたことなかったから…」

僕は、自分でも知らないうちに素直になれない不器用な彼女に惹か

れていたみたいだ。

「嬉しいよ…友達から 始めないか？」

その言葉を聞いた後輩は再び泣いていたが、僕の顔を真っ直ぐに見つめていた。

「……はいっ…！」

僕は、俯き気味で歩き出した後輩の横に立った。

「でも、もう蹴らないでくれよ……これ以上蹴られたら俺……マゾになっちゃうからな」

私は苦笑いしながら、彼女に念押しした。  
いくら愛情の裏返しとはいえ、痛いのは嫌だから。

「はい…もうしません…先輩に…嫌われたくないから…」

彼女は僕のスポーツバックの端をちょこんと摘むと、僕と歩幅を合わせて歩き出した。

夕日の校庭。

振り向いた横顔、僕の宝物に。

「……………」

僕は、息を呑んだ。

一瞬が、永遠になる。

「…だから先輩…よろしく お願いします」

これからの学校生活が、楽しくなりそうだ。

「……ああ、よろしく」  
不器用な笑顔が、かわいいよ。

これからは……よろしく

## 【おまけ】

僕と彼女が一緒に帰れる道のりは短いから、僕と彼女は公園に寄っていくことにした。

「結構……こういう子供っぽいのもいいですね」

僕達はブランコに乗っていた。

「そ　そういえばさ……角手は…」

話かけようとした僕を、彼女は遮った。

「…先輩…名前で呼んで下さい」

彼女…角手ついでの名前は玲奈だった…

「…そりゃ…そうだよな」

確かに親密になりたいなら名前で呼んだ方が自然だった。

「玲菜はさ……自分のことを『僕』っていう男を…どう思う？」

名前を呼ばれて口元が弛んだ玲菜は、少し考えているようだった。  
そして、ブランコから降りて手すりに腰掛けた。

「…先輩って…自分のこと『僕』っていうんですか？」

……

凶星だった。

僕の一人称は家族の間ではまだ

「僕」

だが、学校などでは

「俺」

だった。

因みに学校でも、慌てたりすると

「僕」

と言ってしまうが。

「……」

だって…背伸びしたい年頃なんだモン！！

という苦しくてわけの分らない弁解を、僕は心の中でしていた。  
慌てながら、僕はブランコに座った。

「…そ…そうだよ」

僕は赤くなって俯いた。

何気に、恥ずかしいカミングアウトであった。

「……」

玲菜は手すりから離れて僕に近づく。…僕は彼女にどう受け止められて  
いるか心配であった

「先輩…気にしないでください」

玲菜の顔が、僕に近づく。

彼女のツリ目は、近くで見ると…吸い込まれそうな輝きを放っているようにも見えた。

「…『僕』でも『俺』でも……先輩は先輩です」

じんわりと彼女の言葉が僕の心を打つ。

「私の……きな先輩です」

彼女は赤面しながら、僕の耳元で呟いた。

凄く小さい声でよく聞き取れなかったけど…

…何て言ったか 僕には分かった

「…ありがとう……」

彼女がすっかり赤くなって僕から離れると、僕は立ち上がった。

「さて、帰ろうか」

僕は歩き出した。

「はい 先輩」

彼女と一緒に。

家までの短い道のりだけど、明日また会えるから。



これから本当によろしく。

（後書き）

最後まで読んでいただいて、どうもありがとうございました。

「こんなシンデレじゃねえぞ！」

「……ここは……こうした方が……」

といった感じの感想、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9927a/>

---

『レ』はツンデレの『レ』

2010年10月8日22時09分発行